第24回杏林大学第2外科学教室例会 〔平成8年12月21日（土）10:00～16:00、杏林大学臨床講堂]　

研究会記録

1. 多発肺癌についての検討　　喜多 秀文

原発性肺癌症例において、同時期に複数の病巣が発見された12例につき検討した。対象は1993年4月より1996年10月までに当科で原発性肺癌と診断された242例のうち12例である。3例は生検組織および切除標本より肺内転移とし、他9例を同時期多発肺癌を疑った。組織型が異なったものが3例、組織型が同一であるが、一方の癌がCa. in situ または早期癌であったものが3例である。生検組織像の違いにより多発肺癌を疑って双方を手術した症例が1例、N2 であるがリンパ経路が異なり双方ともほぼ同様であった症例が1例、同一肺葉内の同大腫瘍で、切除後1年9ヶ月経過している症例が1例である。肺内転移であるか多発肺癌であるか診断することは、組織学的検査のみでは困難であり、今後さらに検討を進めていきたい。

2. 巨大な乳腺葉状腫瘍の2例　　增井 一夫

巨大乳腺葉状腫瘍の2例を経験したので報告する。
症例1：46歳女性。右乳房に12.5×9.0cmの表面平滑、弾性軟の腫瘍を触知し、全身麻酔下に腫瘍摘出術を行った。組織像は良性葉状腫瘍であった。
症例2：52歳女性。左乳房に17.0×16.0cmの表面平滑、弾性軟の腫瘍を触知し、全身麻酔下に腫瘍摘出術を施行した。組織像は症例1と同様良性葉状腫瘍であったが、2例とも術後再発を認めていない。乳腺葉状腫瘍は良性と診断されても再発を繰り返すことがある。また再発を繰り返すことにより、悪性化の傾向が見られることがある。また悪性例の頻度も決して低くない。そのため、乳腺葉状腫瘍の術後は、注意深い経過観察が必要である。

3. 急性膿瘍によって発見された大腸腺扁平上皮癌の一例　　増井 一夫

症例：85歳女性。主訴、腹痛、腹渇、便祕。腹部所見：左下部を中心として、圧痛、rebound tenderness、筋性防御が認められ、腸男性音は低下していた。血液検査所見では、貧血、白血球数と CRP の上昇がみられた。腹部 CT で腹水、腫瘤が認められ、腹腔穿刺にて混濁した腹水が吸引された。血性腹膜炎の診断にて手術を施行した。

摘出した腫瘍は大部分が扁平上皮癌で、一部に腺癌が認められ、両者間に移行像がみられたため大腸腺扁平上皮癌と診断された。大腸腺扁平上皮癌の発生には、腺癌の扁平上皮癌変性などがあり、山崎らによれば大腸癌中4.8%、男女比1:1.1、肉眼的分類 Borrmann 2 型が多く、好発部位は盲腸、上行結腸、S状結腸であり本症例は女性、Borrmann 2 型、S状結腸癌であった。

4. 頸部食道癌の切除除去　　渡辺 憲一

頸部食道癌に対して、遠離免疫を用いた化学療再建術は定型的治療として確立されてきている。今回、頸部食道癌 A3（気管）症例に対して喉頭全摘、永久気管造設術を加えた上部食道切除、遠離免疫術式を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。

症例：42歳男性。主訴：痰液困難。近医にて頸部食道癌と診断され、手術目的にて当科入院となった。術前診断は Ca. A3. N1（#101） M1, P10 であり、上記術式の適応となった。本術式は、遠隔免疫の着効、術後観察法、QOL の面から頸部食道癌に対して理想的な術式といえる。予定は recipient vessel の確保にあり、遠離免疫の血液確保に充分留意するべきである。過去5年の報告症例を検討すると再発率が高く術前あるいは術後の追加治療の必要性が示唆された。

5. 肺針生検における Implantation Metastasis の可能性　　田中 良太

肺切除標本への生検針穿刺による細胞学的検討を行ったので報告する。1996年1月から5月まで当科で末期型肺癌と診断された肺葉切除施行症例、24検体に対しておこった。穿刺針は Trucut, 昇毛, 18G 針を使用し穿刺は腫瘍へ胸膜面と垂直に行い、needle track に重